鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 23 年 1 月 21 日）

述而第七

1　子曰く、述べて作らず。信じて古を好む。竊に我が老彭に比す。

孔子が言うには、私は自分で作り出したり自分で考え出したりはしない。昔の人が言ったことをきちんその通り伝えようと努力をしているだけだ。私は昔の人が言ったことを信じて疑わない。古語・古人の言葉を非常に好んでいる。私は誰にも言わないようにしているけれども、殷の時代の賢人である老彭を尊敬して真似をしたいと思っている。

ここが論語という書物の一番の核（コア）だと思っています。論語は「仁」という言葉を非常に重要視していますけれども、私は「述」が論語の基本的な考え方の核をなしていると思っています。述とは、駅伝で襷を次々に渡してバトンタッチしていくようなものです。ここで言うと、先祖がいるから現在の自分たちがいるのであって、親から子供、子供から孫へどんどん伝えていくからこそ、人間は生き延びてゆけるのです。人が人類として営々と歴史を刻んでいくということは、述という言葉を信じて伝えていくという行動をするので、人類は発展し繁栄していくのです。

したがって孔子は自分自身で何かを考え出すのではなくて、先祖の言葉をきちんと間違えずに伝えるように努力をしている。その結果として今日の中国があると、孔子はその時代に考えたわけでしょう。最近の中国は、ノーベル賞に対抗して孔子を冠にして賞をでっち上げるなど、孔子が今の中国の有り様をみればかなり悲しがるだろうと思います。

論語という書物の一番の核は述である。私はそう信じておりますので、ここは特に強く申し上げておきます。

これを現代に置き換えてみましょう。自治体も会社も皆、先祖から代々伝わっているもの、家訓や社訓等きちんとした理想が伝わっていれば、雪印や赤福のようにはならない。創業の考えが途中で消えていってしまう、つまり述がきちんと機能しなかったからです。ちなみに、世界の中で一番企業として寿命の長い組織が残っているのは日本だそうです。そういう日本の組織を残すための技術やノウハウは、他の国には真似の出来ないものがあるようです。親や先祖から受け継いでいるものが仮に薄くなっていたら、自分自身で何か作って、次の世代に伝えようと考えるのもよろしいかと思います。

「窃かに我が老彭に比す」と、孔子は老彭という人物をお手本にしたいと言っていますが、渋沢栄一さんは孔子をお手本にしたいということをきちんと書いて残しております。

2　子曰く、黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず。何か我に有らんや。

孔子は黙って覚え、学んで飽きることはない。人を教えて嫌にならない。このようなことは自分にとって何でもないことだ。

坦道先生はこういう教え方をされておられたでしょうか。周りを見渡して、こういう教え方・学び方をしている先生はなかなかいないと思います。安岡正篤先生は、黙々と自分だけの世界に入って学問を深めておられました。安岡先生は大学でも先生から教わることはあまり好まないで、図書館にこもって、自分ひとりで書物を次から次に読破していくという勉強の仕方だったようです。後年になってからお弟子さんに、「私の学問と同じくらいのレベルになるのは皆さんは無理だろうから、せめて真向法くらいは覚えて戴きたい」と言われたそうです。真向法とは四つの動作で手軽に出来る健康体操です。神官がお辞儀をする時に腰を深々と曲げるというところから真向という言葉が出て、現在かなり大きな組織になっています。真向法ならば年配になってからでも何とか覚えられるだろうけれども、私のような学問の仕方は歳をとってからやったのでは無理だろう。相当小さい時から叩き込まれて、自分でも好きでたまらないという学問の仕方でなければなかなか身に付くものではないという意味でしょう。現実に安岡先生や関連する学校が蔵した書物が、郷学研修所の恩賜文庫に沢山残っています。その量もさることながら、漢文の他に英語やフランス語、ドイツ語の書物にまでルビが振ってあって、すべて原書を読んでおられたのに驚くばかりです。学問の深まることによって、安岡先生は他の追随を許さぬところまで行かれたと感じます。

又、山田方谷先生はこの文章そのままだと思います。明治維新を乗り切って、その後は教育のみに没頭しましたが、まさにこの文章通りの生活ぶりだったようです。

今の教育に携わる人で、この文章のように黙々と覚えて、覚えたことを人さまに教えて嫌にならないし、一所懸命学んで飽きが来ないような人にはお目にかかったことが無いなと感じます。こういうものを目指したいと思います。

3　子曰く、徳の修まらざる、学の講ぜざる、義を聞きて徙ること能わざる、不善　改むること能わざる、是れ吾が憂なり。

孔子が言うには、道徳の修養が足りない。学問を深く掘り下げられない。忠告されても従うことが出来ない。間違いを知りながら直そうと出来ない。これらが私の心配事である。

この文章は孔子が自分の心配事と言いながら、お弟子さん達に向かって、私の弟子だったらもっと真剣に学んで欲しいものだ、と言っていると理解して下さい。

現代に当てはめて政治家の動きでみると、菅さんも仙谷さんも小沢さんも徳の修養が足りている人だとは思えないし、学問を深く掘り下げた人がいるだろうかと感じます。仙谷さんは法廷闘争では学問をかなり振りかざすようですが、同じ弁護士仲間の話では、一知半解（知ったかぶり）でやっているという話も聞かれます。仙谷さんは忠告されても従わないどころか、忠告されたことをまるで氣にしていません。もしかするとこれはまずいかなと思いながら、現在に来ているのかなと思います。我が身を振り返っても、心にグサッとくるような本当の忠告は、なかなか素直に聞けないものです。なるべく歳を重ねたら、人さまのアドバイスを素直に聞くようにしなければいけないなと感じています。

4　子(し)の燕居(えんきょ)するときは、申申如(しんしんじょ)たり、夭夭如(ようようじょ)たり。

孔子が役所から帰った時には、のびのびしてゆったりとして、顔色良くニコニコしている。

孔子の私生活はこういうものだったのでしょう。良いものだなと感じます。

仕事から帰って自宅でくつろぐ時は、のびのびしてゆったりしてにこやかで、家族円満でくつろいでいるような生活が出来ると良いなと思います。

本日は以上で終了です。